

## 序

建設業界の研究所が本格的活動を開始してから、もはや10年以上の歳月を経ました。いまや、少なくとも量的に見る限り、そこからかなりの成果が世に送られております。しかし、われわれの成すべきことはあまりに多く、自らの力の足りないことを口惜しく思うばかりです。

企業の研究所が、国全体の研究開発体制の中で、どのような役割を持つべきかということについては、いろいろと意見のあるところかも知れません。

しかし、それが現実の生産に直接役立つことへ志向するのは自然の成り行きでありましょう。

本号においても、取り上げられたほとんどのテーマがそのようなものになっております。

これを見ますと、古くからの多くの問題が依然として片付いていない一方、公害関係や、業務への電算機の利用など、新しい問題が次々に起こっていることが分かります。

いま、この18号が世に送り出されたといっても、われわれの仕事が一般に目に見えるような急激な変化を示すとは思われませんが、しかしこのようなことが積み重なって、長い間には建設業の姿も大きく変わってきていると感ずるのです。

本報告が、そのような組石のひとつとなることを願うとともに、大方のご鞭撻を期待します。

1971年10月

清水建設株式会社研究所 所長

工博 烏田 専 右